

勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十二号

2010.7.15

小論・研究余滴・随想



『源氏物語』 成立論の可能性

加藤 昌嘉

M L A = Museum, Library, Archives

水谷 長志

漢詩の動作語の豊かさ

高松 寿夫

出雲の文化遺産

芦田 耕一

問題領域としての小田嶽夫

松本 和也

蒲焼き・柳川鍋・

すき焼き・もつ焼き (一)

小林 祥次郎

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

近刊ニュース

- ・『京都学を楽しむ』
- ・アジア遊学134 『東アジアをめぐる金属工芸』
- ・『大谷光瑞とアジア』
- ・『靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・鬼の日に比較研究』
- ・早坂暁コレ 『夢千代日記』
- ・クシヨーン17 『夢千代日記』
- ・アジア遊学135 『出雲文化圏と東アジア』
- ・ネットワーク時代 『デジタル書物学事始め』
- ・図書館情報学 『情報ネットワーク法』
- ・『金子みすゞ 永遠の抒情』

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

『源氏物語』成立論の可能性

加藤 昌嘉

(法政大学准教授)

『源氏物語』成立論の隆盛と凋落

大野晋と丸谷才一が『源氏物語』について語り合った対談が『中央公論』に連載されていたのは私が高校生の時のことで、どの場面が抜萃されどういふ現代語訳が付されどういふ問題があまり出されるのか毎月楽しみに読んでいたのですけれども、今思えば、武田宗俊の「玉鬘系後記説」というものを、私はそこで初めて知ったのでした。

大学では経済学部に入ったため、日本の古典に触れるのは「一般教養」の「国文学」の授業だけでしたが、たまたま一年だけ神戸松蔭女子学院大学の片岡利博先生が出講されていて、そこで私は、『萬葉集』の字余り法則の話や『枕草子』の異文の話や『今昔物語

の、成立論に対する憎々しげな態度は、いつたい何に由来するのか、興味深く思っているところです。

『源氏物語』成立論から

何を汲み取るべきか

このたび、私は、中川照将氏と協力し、『テーマで読む源氏物語論(四) 紫上系と玉鬘系——成立論のゆくえ——』を編集しました。青柳(阿部)秋生・玉上琢彌・武田宗俊・風巻景次郎らの諸論を再録し、詳細な解説を加え、また、それを批判した論文・それらを総括した論文・それらを引き継いだ論文を取めました。正直に申しますと、これらの論文はどれも、感動的なまでに納得されるところと、印象批評に傾いてまったく承伏できないところの、両方を含んでいます。読者の皆様には、ぜひ、これらの諸論を読んで、現代人として何を受け継ぎ、何を切り棄て、どのように頭を切り換え、どのように

集』に載る竹取説話の話や『源氏物語』の成立論の話を読み、あまりの面白さに、文学部への転部を決意したという次第です。『源氏物語』の成立論について、片岡先生は、青柳(阿部)秋生・玉上琢彌・風巻景次郎・武田宗俊がそれぞれどういふ説を唱えたか、わかりやすく説明してくださいました。そのときの脳髓の震えは、今も忘れ得ません。ただ、その話の最後に、これら成立論は「近代合理主義」による「仮説」に過ぎないとして現在では否定的に捉えられている、という話を聞き、何ともがっかりした記憶があります。

武田宗俊・風巻景次郎らによる『源氏物語』成立論とは、『源氏物語』現

存五十四帖は、現在の巻順通りに執

問題を発展させてゆくか、各自で考えていたかと思つています。「概念を変革すること」……これこそが、過去の論文を読む意義ではないでしょうか。

実は、武田宗俊の「玉鬘系後記説」

は、一般向けの啓蒙書では、繰り返して喧伝されています。大野晋『源氏物語』(岩波現代文庫)・西村亨『源氏物語とその作者たち』(文春新書)がその代表です。しかし、前者では、風巻景次郎やその他の論者の説はほとんど無視され、『源氏物語』の作者を紫式部一人だとして疑わぬ話が展開されています。後者でも、武田宗俊ばかりを言挙げしつつ、『源氏物語』は一人の作者が書いたものではなく、玉鬘系の巻々は男性が書いたのだという(折口信夫譲りの)話が進められています。どうして、玉上琢彌や風巻景次郎や、後年の阿部秋生や稲賀敏二が展開した諸論を考慮に入れないのか? どうして、最

筆されたのではない」と主張するものです。『源氏物語』の第一部が、光源氏と藤壺・紫上・明石君たちを中心とする「紫上系(本伝)」の巻々と、光源氏と空蝉・夕顔・玉鬘たちを中心とする「玉鬘系(別伝)」の巻々とに分かれ、しかも、玉鬘系の巻々は、後から、スピンオフのように書かれ挿入された、というのです。この説によつて、『源氏物語』をまっすぐに読もうとして生じる様々な矛盾や不合理が解決される、ということです。この説に対しては、猛烈な批判の矢が浴びせられたようですが、私が見聞したのは、むしろ、きわめて感情的な拒否反応でした。私が武田宗俊の名を出すと、或る和歌研究の先生は、「武田宗俊は、キ●●イだ」と吐き棄てるようにおっしゃいましたし、或る物語研究の先生は、「学会で玉鬘系とか紫上系とか言うのはやめた方がよい」と忠言してくださいました。一九五〇〜七〇年代の空気を知る方々

初に書かれた巻は桐壺巻だと決めてかかっているのか? どうして、成立論・作者論と本文論・享受論を切り結ぶ視点を呈示しないのか? どうして、『うつほ物語』や『伊勢物語』や『住吉物語』の成立のありようを考慮に入れないのか? どうして、散佚した「桜人」巻や「巢守」巻の存在性を考慮に入れないのか? ……等々、憤懣やるかたない思いがします。今回、『テーマで読む源氏物語論(四) 紫上系と玉鬘系——成立論のゆくえ——』の冒頭に取めた総説は、私と中川氏とが、検討に検討を重ね、かつての成立論議のうち何を汲み取るべきか、何を棄て去るべきか、そして、新たにどういふ問題を運動させて考えるべきか、現代的視点から、二〇代の学生が読んでもわかるように書き下ろしたものです。『源氏物語』がどのように書かれ、どのように流布し、どのように生成変化し、どのように固定化するのか、という問

「MLAマガジンの登録申し込み・取り消しは「magazine」
 題は、『伊勢物語』研究・『うつほ物語』
 研究・『枕草子』研究・『新古今和歌集』
 研究』『平家物語』研究などと切り結び、
 日本古典文学の本質に迫り得る可能性
 を秘めています。



好評既刊

テーマで読む源氏物語論

今西祐一郎・室伏信助 監修
 上原作和・陣野英則 編

1 「主題」論の過去と現在

A 5判上製・定価一〇五〇〇円(税込)

2 本文史学の展開

／言葉をめぐる精査

A 5判上製・定価八四〇〇円(税込)

3 歴史・文化との交差

／語り手・書き手・作者

A 5判上製・定価二六〇〇円(税込)



テーマで読む源氏物語論 4

紫上系と玉鬘系
成立論のゆくえ

今西祐一郎・室伏信助 監修 加藤昌嘉・中川照将 編
 A 5判上製・定価一〇五〇〇円(税込)

『源氏物語』はどのように出来たのか？――

成立論とは、平安文学の実態に迫る、最もアグレッシブな思考実験である。

『源氏物語』は現在の巻順どおりに書かれたのだろうか？

『源氏物語』は一個の長篇小説なのだろうか？

阿部秋生・武田宗俊・風巻景次郎らの仮説を再検証し、
 物語研究の概念を根本から問い直す！

刊行のことは／今西祐一郎・室伏信助

総説 『源氏物語』はどのように出来たのか？を考えるために

／加藤昌嘉・中川照将



第一部 紫上系・玉鬘系の発見

青柳秋生／源氏物語執筆の順序

池田龜鑑／源氏物語の構成

武田宗俊／源氏物語の最初の形態再論

第二部 成立論に対する疑問と総括

岡一男／源氏物語の主題とその成立過程

長谷川和子／武田宗俊氏著「源氏物語の最初の形態」の検討(抄)

阿部秋生／結語

稲賀敬二／源氏物語成立論の争点

秋山 虔／源氏物語の成立・構想の問題

第三部 成立論の可能性と概念の変容

片桐洋一／あて宮物語と忠こそ物語

中野幸一／源氏物語の成立と構想

片岡利博／蓬生巻の「めつらし人」
 再録論文執筆者紹介

玉上琢彌／源語成立攷

武田宗俊／源氏物語の最初の形態

風巻景次郎／源氏物語の成立に関する試論

稲賀敬二／宇津保物語は合作か？

増田繁夫／源氏物語の成立

藤井貞和／紫上系と玉鬘系

田村 隆／夕顔以前の省筆

MLA = Museum, Library, Archives

水谷長志

(国立美術館情報企画室長)

アート・ドキュメンテーション学会の
 二〇周年記念事業

本書はアート・ドキュメンテーション学会(創設一九八九年、J A D S : Japan Art Documentation Society)の二〇周年記念フォーラム「日本のアート・ドキュメンテーション——二〇年の達成 M L A 連携の現状、課題、そして将来」を記録するものです。記念フォーラムは昨年二〇〇九年十二月四―五日の二日間にわたり東京国立博物館平成館大講堂において開催され、参加者数約二七〇名(二日間の延べ参加者数約三五〇名)を得て盛会のうちに無事終了いたしました。

「日本のアート・ドキュメンテーション——二〇年の達成」と題した今回の

フォーラムが何故「MLA連携の現状、課題、そして将来」にフォーカスを当てるのか、そしてその記録となる本書の書名もまた『MLA連携の現状・課題・将来』なのかを説明しておかなくてはならないでしょう。MLAにしら、そもそも学会名にあるアート・ドキュメンテーションという言葉自体、聞き慣れないことでしょうか。

アート・ドキュメンテーション学会
 創立の機縁

アート・ドキュメンテーション学会(創設時、研究会)は、主に美術図書館員(アート・ライブラリアン)、たとえば武蔵野美術大学美術資料図書館、東京都美術館美術図書室、桑沢デザイン

研究所図書室などに勤めるメンバーが中心となって、一九八六年のIFLA(国際図書館連盟)東京大会での美術図書館分科会の開催を契機に発足しました。当時、専門図書館の世界には音楽図書館のための連絡組織はありましたが、(美術分野にはなかつたので)この大会を機に欧米にある美術図書館協会(ARLIS: Art Libraries Society)に類縁する組織を日本にも作ることにになりました。そのプロセスにはいろいろ紆余曲折もありましたが、会の名称に図書館を含まない、図書館員だけでなく美術の資料と情報に関わる全てのプロフェッショナルを巻き込めるネーミングとして「アート・ドキュメンテーション」を採用しました。

それは美術の資料と情報に向かい合うとき、作品もあれば図書もある、作家の書簡もあるし写真もある、展覧会の案内葉書やブローチャーなどエフェメラな資料も数限りなくある。ある

側面ではアート・ドキュメンテーションはライブラリの課題であり、別の側面ではミュージアムの、アーカイブズの領域にも及び、そして常にその三者は絡み合い連携して、総体としてアートのドキュメンテーションそのものになっている。まるで三つの館の壁の上を綱渡りするような作業がアート・ドキュメンテーションなのだ、会を起しながら気づいていったのです。

「ミュージアム・ライブラリ・アーカイブをつなぐもの」一九九四年のテーマ

そして創設から五年経った一九九四年、五周年第一回のフォーラムを国立国会図書館で開催したときの総合テーマが「美術情報と図書館」であり、メイン・シンポジウムが「ミュージアム・ライブラリ・アーカイブをつなぐもの——アート・ドキュメンテーションからの模索と展望」となったのです。まさにMLA連携の萌芽です。

実例として、国立国会図書館のデジタル・アーカイブポータル(PORTAL)がありますが、その構築の意義とインセンティブを鼎談において長尾真国会図書館長が極めて明解かつ力強く述べられたことが印象に残りました。MLAの存立そのものを国の文化力の根源であると語られた佐々木丞平国立文化財機構理事長(京都国立博物館長)、極めて厳しい状況の中で公文書管理法の制定の先にあるべきアーカイブ像をいかに描けるかを問うた高山正也国立公文書館長、というようにこの鼎談はMLA連携の課題を越えて、日本の文化力についての歴史的証言として残ることでしょう。多くの方々を読んでいただきたい鼎談録です。



その後二〇周年、一五周年とフォーラムを開催しましたが、記念すべき二〇周年は、第一回のフォーラムのメインテーマである「MLA連携」に立ち戻りました。

昨年のフォーラムは、二日間五部構成で開かれました。第一―二部「日本のアート・ドキュメンテーション——二〇年の達成」は、二〇年の達成を顕著に示し、また本会と比較的なじみの深い機関の成果を示す展示とプレゼンテーション。第三部「日本におけるMLA連携の現状と課題」は、MLA連携を各々の現場から推進提言を試みている方々の発表とそれを踏まえたパネルディスカッション。第四部は、国内では初めての国立MLA三館長による鼎談会「これからのMLA連携に向けて」。最後の第五部「日本のアート・ドキュメンテーション——二〇年の達成とJADS」は、アート・ドキュメンテーションの二〇年の歴史をJADS

Sの会長、幹事長の目から振り返るシンポジウムとなりました。

これからのJADS連携に向けて
——三館長の言葉から

本書においては第五部を除きました。他は国立MLA三館長による鼎談会の復元を含んでほぼ全てを記録し、さらに三〇ページにわたる「MLA連携関連年表一九八〇―二〇〇九」を新稿として付録にしました。

本書において、また近時多方面でしばしば語られるMLAですが、十五年前、一九九四年の第一回のシンポジウムでは、MLAの三者が並立して議論すること自体が初めての試みであり、共通言語を模索しつつなんとか議論が進んだことを思い出します。隔世の感があります。とは言っても、実体としての連携を築くにはまだまだ多くの時間を必要としているようです。

現在、数少ないMLA連携の実装の

MLA連携の現状・課題・将来

水谷長志 編

A5判上製・定価三六七五円(税込)

日本における博物館(Museum)・図書館(Library)・文書館(Archives)には、それぞれが取り扱う資料の特性や組織の枠を超えた連携が求められている。欧州デジタルEuropeanaの誕生、ドイツデジタル図書館DDB構想、カナダ国立図書館・公文書館LACの発足：日本はこの国の体制のなかで、どのようにMLA連携を築いていくのか。

国立MLA三館長(京都国立博物館・国立国会図書館・国立公文書館)による貴重な鼎談も収録。

◆鼎談 これからのMLA連携に向けて
◆日本におけるMLA連携の現状と課題

MLA(連携)のために十五年の歳月を踏まえて
大学図書館からのMLA連携の視点 インターネット時代のMLA連携の構造
国立国会図書館におけるデジタル事業と他機関連携への取組み
国立公文書館におけるデジタルアーカイブ化の推進と情報連携の取組み等に関して
博物館の情報環境とMLA連携
MLA連携の動向とこの連携を促える三つの視点
(連携)へ向けてMLAの現場から

◆日本のアート・ドキュメンテーション

東京国立博物館収蔵品管理システム開発の経験から
コレクションデータベースから文化財アーカイブスへ
東京文化財研究所『日本美術年鑑』とデジタルアーカイブ
国立西洋美術館の情報戦略
衣文化情報拠点としての(服装・身装文化データベース)の構築
文化財情報発信の実験
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館演劇情報総合データベースを中心に
アート・アーカイブの実践

◆MLA連携関連年表 1980-2009
美術館図書室と美術図書館連絡会(ALC)



漢詩の動作語の豊かさ

高松寿夫

(早稲田大学文学術院教授)

このたび、中国の清華大学の雋雪甌氏と共同編集で、『日本古代文学と白居易——王朝文学の生成と東アジア文化交流——』と題した論文集を刊行した。私は普段、『万葉集』などを専攻している者なので、まさか表題に「白居易」を含んだ論集を編集することになるとは、自分でも思ってみなかつたが、これはめぐり合わせというものである(その経緯については、論集の巻頭に記しておいた)。

白居易の動作語

さて白居易というと、日本文学畑の者——というより、日本で中等教育を受けた者なら大概の者が、すぐ思いつく一節に、「遺愛寺鐘欹枕聴、香炉

漢詩の動作語
しかし、この身体性の豊かさは、ひとり白居易の作品に限ったものではなく、漢詩全般に共通するものでもある。高校までの漢文の授業でおなじみのものに限定しても、「挙頭望明月、低頭思故郷」「醉臥沙場君莫笑」「白頭搔更短」「欲窮千里目、更上一層樓」「揮手自茲去、蕭蕭班馬鳴」……など、枚挙に暇がない。そして、単に動作語が多いというだけでなく、それぞれの動作が、詠者の心理や感情を雄弁に語っている場合が多いように思うのである。

峰雪撥簾看(遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥げて看る)という例の一聯がある。この一聯、菅原道真が結構を借りて詩を詠じ、『和漢朗詠集』にも採られ、中宮定子のサロンでもこれを踏まえた知的会話が試みられた、著名な一節であることは、いまさら言わずもがなのことである。私は、この一聯両句に、いずれも動作語が含まれていることを興味深く思っている。すなわち、前句には「欹枕」、後句には「撥簾」がそれぞれである。それがどうした、とお思になるかもしれないが、和歌などに普段から親しんでいると、このある種の身体性の豊かさには、なかなか新鮮な印象を受けるのである。

ただ、それぞれの動作語のニュアンスの理解となると、案外、困難がともなう。白居易詩を例に言えば、「欹枕」は「枕を欹て」と伝統的に訓じられ、それがどのような動作なのかについて諸説があつたが、埋田重夫氏によつて「枕に側臥する」の意であることが明らかとなつた(『中国文学研究』14)。し

かしなお、それをどう訓じるかは、検討の余地があるように思う(埋田氏の提唱する「枕に欹はる」は、私には違和感がある)。「撥簾」は、床に臥したまま簾をちよつと撥ね上げる様を言うもののようで、清少納言の仰々しい振る舞いはおおよそ見当違いとなるが、それそもそもは、「簾を撥げ」という訓に引かれた結果と言える。

動作語を含む詩語辞典の必要性

問題は、白居易の特定の詩をどう理

解するかという問題にとどまらない。「欹枕」という語は、白居易は好んで用いており、他の詩人の作にも中・晩唐を中心に用例がある。そこにはなにかしらの共通する風情というものが感じられていたと思われる。前節で例示した他の漢詩句で傍点を付した語も、その一首だけにとどまらず、あるていど類型化しつつ頻用されたものばかりである。漢詩を理解しようとするとき、それらの動作語が詩作の広がりのおかげで、どのような独特のニュアンスをと

もなつていたかを知ることが、非常に重要なことではないか、と素人ながらに強く感じている。和歌の歌語辞典類が各種行われているのに比して、詩語辞典的なものじたいが乏しいように感じているが、もし新たな詩語辞典が編纂されるときには、ぜひ、用例に即した動作語の解説を充実してもらいたいと願っている。



日本古代文学と白居易

王朝文学の生成と東アジア文化交流

高松寿夫・雋雪甌 編

A5判上製・定価八四〇〇円(税込)

東アジアの広がりの中で、白居易はどのように変奏されたのか



中国本土はもとより、日本や、新羅など朝鮮半島においても受容され、東アジア共通のモードとして文学や信仰、政治の場に至るまで多岐にわたる文化的影響を与えてきた唐代の詩人・白居易。日中双方の視点から、日本における受容のあり方を中心に、東アジアの文学的伝統と展開の諸相を明らかにする。

丹羽博之／絹を借しむ詩歌
李 滿紅／大伴旅人「讀酒歌」の発想と表現
河野貴美子／島田忠臣、菅原道真の詩と白居易
謝 思煒／予載佳句所載の白居易佚詩に関する考察
木戸裕子／大江匡衡「述懷占調詩」百韻における白居易受容
吉原浩人／高階積善勸学会詩序考
山中悠希／「枕草子」塚本・前田家本における「白氏文集」受容
陣野英則／「源氏物語」玉鬘十帖の「白氏文集」引用
中西智子／「源氏物語」と白詩「陵園妾」
岡部明日香／「采花物語」の新案府引用
雋 雪甌／句題和歌から見る日本における中国文化の受容
鏑 武彦／勅撰集の漢故事題和歌
張 哲俊／部門・部門・柳考
高松寿夫／「菅家文章」元禄版本本文の性格
索引

出雲の文化遺産

芦田耕一

(島根大学法文学部教授)

山陰地方の島根県と鳥取県の位置を正しく把握していない人がおり、また「島」と「鳥」が似るせいか、混同する人も多くいる。今は廃刊になった「朝日ジャーナル」で、東京人がもつとも遠く感じるのが秋田県と島根県だと紹介していたのを読んだことがある。

古代遺跡の宝庫

島根県東部の出雲地方には独自の文化があった。一九八四年には、簸川郡の荒神谷遺跡で、三五八本の銅剣が発見され、翌年には銅鐸六個、銅矛十六本も出土し、しかも同一場所で見つかったことのないこれらが一緒に発掘され、「世紀の発見」といわれたことは記憶に新しいところである。九六年には近

和歌発祥の地

古今和歌集は、記紀歌謡にある、サノオの「八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」を人の世になって最初に詠まれた三十一文字の歌だと揚言している。和歌文学を専門とする私(大阪出身)が出雲に赴任できたことは幸せであった。地元の人が和歌発祥の地だとはまったく知らない

くの加茂岩倉遺跡から銅鐸三十九個が見つかった。これらは出雲大社のそばに最近開館した島根県立古代出雲歴史博物館に展示されているが、現物を目の当たりにすると実に壯観で、出雲の力に敬服してしまう。これらの強みは、説明なしでも一見して妙に納得するところにある。この文物を何も否定するつもりはないが、あまりにもイメージが強すぎ、その分、文献を扱う分野がことさらに等閑に付されることに与ってきたのではないだろうか。

古事記・日本書紀・出雲国風土記

奈良時代に成立したこれらは出雲にとつてすこぶる大事な古代文献である。漢文体で書かれているというだけ

ことにまず驚いたので、これを枕にして話を始めるのを常としている。出雲歌壇は出雲大社の神官が中心になっていることが特徴である。江戸時代末期には隆盛を極め、和歌の結社が二つも作られ、お互いに歌会を催行するなど大いに研鑽を積む。その結果、伯耆や因幡などの歌人も含む『出雲国名所歌集』や出雲歌人だけの『類題八雲集』

で敬遠されてしまう、損な役回りを演じ続けてきたのであるが、島根県は出雲神話を見直すべく、今これらに光を当てようとしている。出雲神話といえ、まずサノオノミコトである。地上に降り立ったサノオは八俣大蛇を退治し、その尾から草薙の剣を得たが、その舞台となったのが斐伊川流域で、鉄文化との関連を窺わせる。出雲は鉄の生産が盛んで、特にそれは「たたら製鉄」と称されている。因幡の海岸で怪我に苦しむ兔を治療したオオナムチも無視できない。年長の神々からのいじめともいえる試練を経て国土の支配者となり、オオクニヌシノミコトと名乗る。出雲大社の祭神である。

著名な国引き神話は記紀神話にはなく、出雲国風土記にだけ見出される。出雲国は小さいのでもっと大きくしようとして、周囲の余った国を引き寄せたという話の想像力、スケールの大きさは私のもつとも好むところである。

などの多くの類題和歌集を次々と三都(江戸・京都・大阪)の書肆から、または私家版として上梓する。これ以外にも、俳諧や連歌も多く制作されており、名家にはこれらの資料が数多く残存していることが分かってきた。出雲地方はかほどに文化豊潤の地なのである。



二〇一〇年七月下旬刊行予定

アジア遊学 135

出雲文化圏と東アジア

芦田耕一・原豊一 編

A5判並製・定価二二〇〇円(税込)

新しい切り口で「出雲」を掘り起こす

『古事記』『日本書紀』に描かれ、神の国といわれる出雲。その強い宗教性の特徴とする地域全体を、「出雲文化圏」と設定し、時代・地域横断的にとらえなおす。韓国や台湾など東アジアからの視点による「出雲神話」の再解釈、強い宗教性に刺激を受けた人々の交流と、それに伴う技術的・産業的な発展、文芸創作や学問など、「神話」の世界にとどまらない、知られざる文化の諸相を明らかにする。

序言／芦田耕一・原豊一

I 古代の視点から

『出雲国風土記』研究の明日への道(関和彦)
韓国から見た出雲神話(関内勲)
台湾から見た出雲神話(岡部明日香)
長元四年の杵築大社顛倒・託宣事件(大日方克己)
コラム島根県神原神社古墳の三角縁神鏡と異界(正道寺康子)

II 旅と交流

伊能忠敬測量隊わが村に來たる(高安克己)／鯛の歌詠み(蒲生倫子)
コラム京都に残る出雲(久保田孝夫)

III 信仰と技術

「神国」出雲の宗教事情(小林准士)／出雲大社(和田嘉寿)
「たたら」をめぐる人々の動き(鳥合智文)
出雲の狛犬(廣江正幸)／明治に生きる江戸の技術(藤木竜也)

IV 文芸と遊び

奉納和歌の世界(芦田耕一)／明治初期の出雲漢詩壇について(栗木純一)
松江藩と美祿(田中則雄)／楽人としての田代元春(原豊一)
コラム手銭さの子と杵築文学(佐々木杏里)

V 学び舎の風景

書写狂(大嶋陽二)／歌集『山下水』をめぐる家と人々(山崎真希)
山陰歴史館初代館長足立正の視点(梅林智美)／コラム池田亀鑑の生い立ち(伊藤鉄也)



問題領域としての小田嶽夫

「中国」という視座から

(信州大学准教授)

小田嶽夫への注目

小田嶽夫(明治三三年七月五日〜昭和五四年六月二日、本名・小田武夫)という作家は、昭和二年、「城外」(『文学生活』昭和二年六月)で第三回芥川賞を射止めたこと、あるいは「魯迅伝」(筑摩書房昭和一六年)という本邦初の本格的魯迅評伝によって、文学史上にその名をどめてきた。とはいえ、小田には文庫本はおろか全集もなく、読むこと自体が困難な状況がつづいてきた。ところが、「東アジア」や「中国」といった、近年のムーブメントに照らしてみると、ならば、その文学的営為は改めて見直すべき重要なものとして再発見できるはずだ。

長かった同人雑誌時代から戦後へと

端を発する日中開戦以前、小田嶽夫は魯迅の死(昭和二年一〇月一九日)に際して、複数の追悼文を執筆する。その文学的価値を高く評価した小田は、「大波小波 魯迅を悼む 中国青年の心の灯」(『都新聞』昭和二年一〇月二日)において、『つっしんで支那の国民的芸術家にして又我等東洋の誇る世界的芸術家魯迅の逝去に哀悼の意を表す』と書いている。

自分が親しんだ「中国」と日本が争うという現実に対し、小田は複雑な感懐を抱きつづけていく。その渦中で小田は、「泥河」(『改造』昭和二年一〇月)を発表する。小田にしてみれば、ことさら時流にあわせたわけではないのだが、「城外」の系譜をひくかのように、戦争という状況のなか恋愛を描いた一篇は、当時流行の報告文学として受けとめられた。戸坂潤「文芸時評」(『ルポルタージュ』と「小説」(『中外商業新報』昭和二年九月二八日)、丹羽文雄「文

至る文学活動は、小田三月編『小田嶽夫著作目録 七周忌にあたり』(青英舎昭和六〇年)を参照すれば一望できる。その中でも「中国」は、小田文学の重要なモチーフ/テーマとして一貫している。ここでは、「中国」という視座から文業の一端を素描することで、小田嶽夫という問題領域について考えてみたい。

小田嶽夫と「中国」

小田嶽夫にとって「中国」とは、外務省書記生として杭州領事館に赴任したことが直接的な関係の端緒となっている。この体験は、自他ともに認める小田文学のエッセンスとなり、文壇デビュー作の「日本学士蔡萬」(『新潮』

芸時評(一) 小説の運命 作家の時代に処する覚悟」(『報知新聞』昭和二年九月三〇日)、石川達三「十月の文芸時評(中) 報告文学への関心」(『信濃毎日新聞』昭和二年一〇月六日夕刊)、大岡昇平「文化月報 小説 女流作家のナルシスム」(『文学界』昭和二年一月)といった同時代評が、「泥河」を一樣に報告文学と位置づけていったのだ。こうした事態は、戦時下にあつてなお「中国」というテーマを書きついでいく小田に、時流が追いついたものとみるべきだろう。

魯迅への接点

『魯迅伝』刊行に先立って、小田嶽夫は魯迅をモチーフとした短篇を発表している。「飄泊の魯迅」(『文芸春秋』昭和一三年七月)がそれで、タイトルにも示唆されたように、厦門大学教授時代の魯迅の鬱屈がテーマとされている。この作品は発表当時、上司小剣「文

昭和九年九月)を皮切りに、「城外」(前掲)、短篇集『紫禁城の人』(墨水書房、昭和一六年)、『望郷』(学習研究社、昭和三〇年)などを生み出していく。そればかりでなく、小田には中国文学の翻訳や伝記に関する仕事も多い。在中体験を生かした『支那人・文化・風景』(竹村書房昭和二年)や『揚子江文学風土記』(龍吟社、昭和二六年、武田泰淳との共著)といったエッセイ、郁達夫『過去』(春陽堂、昭和七年)や茅盾『幻滅』(『セルバン』昭和一〇年一〇月)、さらには『大魯迅全集 第七巻』(改造社、昭和二年、鹿地亘との共訳)といった翻訳、さらには「魯迅伝」(筑摩書房、昭和一六年)、『郁達夫伝』(中央公論社、昭和五〇年)などの伝記を残した。文字通り、「中国」とは、小田にとって文学活動の支柱だったのだ。

戦時下「中国」への関心

昭和二年七月七日の盧溝橋事件に

芸時評【3】西鶴と魯迅 大きな共通点」(『都新聞』昭和二年七月六日夕刊)や中島健蔵「文芸時評① 異国趣味か否か 小田嶽夫と佐藤俊子の作品」(『東京朝日新聞』昭和一三年六月二八日)などにおいて論評され、魯迅の心情の描き方が高く評価された。

『魯迅伝』は、一書にまとまるまでに、紆余曲折をへた書物である。「魯迅伝(第一回)」が発表された『新風』(昭和一五年七月)は、存続があやぶまれながら創刊された同人雑誌で、岡田三郎「文芸時評①『新風』の廃刊」(『福岡日日新聞』昭和五年七月六日)では、『小田嶽夫の『魯迅伝』がこのまま立消えになるのはわけても心残りである』と危惧されていた。実際に『新風』が廃刊となった後、『魯迅伝』は文芸誌連載(『新潮』昭和一五年九月一二月)をへて、それらをベースとしつつも、書き下ろしとしてまとめられる。太宰治が

『惜別 医学徒の頃の魯迅』(朝日新聞社、

×「ルマガジンの登録申し込み・取り消しは、こちらから」

昭和二〇年）執筆の際に参考にしたことでも知られる『魯迅伝』は、後々まで読みつがれていく小田の代表作になった。

同作は書評でも多く取りあげられ、中野重治「小田嶽夫の『魯迅伝』」（『読売新聞』昭和一六年五月二八日）をはじめ、浅見淵「小田嶽夫著『魯迅伝』」（『新潮』昭和一六年五月）、青柳優「新刊紹介 小田嶽夫著『魯迅伝』」（『早稲田文学』昭和一六年五月）、浅見淵「小田嶽夫『魯迅伝』に關連して」（同前）、武田泰淳「小田嶽夫『魯迅伝』」（『中国文学』昭和一六年五月）など、質量ともに充実した反応を引き起こすこととなった。

総じて、「城外」や「魯迅伝」はもちろん、「中国」を直接／間接的なモチーフ／テーマとした小田嶽夫の文学活動総体は、たいへん重要な問題領域であり、研究の進展が望まれる。



大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡

二〇一〇年七月下旬刊行予定

柴田幹夫 編

A5判上製・定価六八二五円（税込）

世界的視野をもった巨人、大谷光瑞の真相。

大谷光瑞の魅力と意義をアジアという地域性のなかに追求。ロシア、朝鮮、中国、チベット、トルコ、南洋など各地域との関わりを詳述するほか、建築、香、薬物、外務省外交記録など多角的な観点からの論考を多数収録。海外開教と学術調査の全貌を究明する。

第一部 大谷光瑞研究の実情と課題 第二部 大谷光瑞小伝
第三部 大谷光瑞とアジア 第四部 大谷光瑞とその時代
索引／大谷光瑞年譜



靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究

諏訪春雄 著

A5判上製・定価八四〇〇円（税込）

初の日中比較研究で解明した靈魂の怪異。著者三十年の成果。

神・妖怪・幽霊・鬼は靈魂の働きによる怪異現象である。

人間と自然の靈魂が相互に交流しながら怪異を生む。

日本と中国の古代から現代までを大観した靈魂の文化誌。

索引完備で事典を兼ねる。

靈魂・神・精霊／妖怪と幽霊／中国の神観念／日本の神観念／中国の妖怪／日本の妖怪

日中妖怪観の比較／中国妖怪の形成／鋪言／日本の幽霊／日本人の外界観／祖霊信仰

幽霊の可視化／怨霊化する幽霊／地獄観の日本の変容／幽霊と妖怪の交錯

日本的幽霊像の形成／近世の幽霊／中国の幽霊／鬼／まとめ／索引



蒲焼・柳川鍋・すき焼き・もつ焼き(一)

くいものの語源と博物誌

小林祥次郎

今年七月二十六日が土用の丑の日なので、蒲焼を中心にして、肉類を焼く料理をまとめて扱う。

○蒲焼

落語「やかん」に

「あれは本当は馬鹿焼きと言う。馬鹿な魚だ。だからこれを馬鹿焼きと言ったが、名前が悪い、食者がないから。これを引っくり返して『かば焼き』となったんだ」「名前をひっくり返すのはおかしいね」「返さないと焦げる」（『平生全集 別巻中』）

というこじつけの語源説明がある。

蒲焼の語源については、斎藤彦磨

『^{かまよのな}神代余波』(中)に、昔、蒲焼と言ったものは、魚の口から尾までを竹の串で貫いて焼いた、それが蒲（がま・かば）の穂に似ていることによると言っているのが正しいようだ。室町時代の『大草家料理書』に、宇治丸（京都府宇治市産のウナギ）の蒲焼は、丸焼きにして切り、醤油と酒とをまぜて付ける、山椒味噌を付けてもよい、とあるのが蒲焼の最古の例だからだ。

他にもさまざまな説がある。①焼いた皮の色が紅黒で、樺（かば）の皮に似ているから（黒川道祐『雍州府志』168(六)など）、②平安時代の『新猿楽記』に、香疾（かばやき）大根という名が見える、これは香ばしい香りが疾く鼻に入るということであろう（山東京伝『骨董集』(中)

など）、③蒲鉾^{かまぼこ}の形だから（喜多村信節『瓦礫難考』(二)）など。語源説というものは、こんなふうにいるいろいろとこじつけることが出来るものだ。

蒲焼の鰻の裂き方について、『守貞謾稿』では、「生業上」には京阪では背から裂き、江戸では腹から裂くとし、「生業下」では、京阪では腹から、江戸では背からと、逆のことを記している。現在は後者が行われている。武士の町である江戸では腹を切るのを嫌うからだと言う。

『浮世風呂』(二上)に、上方の女と江戸と女とが言い争うところがある。その中で、上方の女が、「鱈^{たら}なども御当地のは和^{やど}いばかりでもみない（うまくなじがナ。：鉄串^{てつくし}にさして焼くぢや。ハ、その焼いた跡で能^{えい}程づつに切つてナ、平（底が浅く平たい腕）に入れてぎつしりと蓋して出すさかひに、なんぼでもさめるといふ案^{あん}じ（心配）がないわいな」と言うと、江戸の女は、「江戸

×エールマガジンの登録申し込み・取り消しは<http://www.ail.com>

ぢやア、そんなけちな事は流行らねえのさ。江戸前の蒲焼は、ぼつぼつと湯気の立つのを皿へ並べて出す。食べる内に冷めたら、その儘置いて、お代りの焼き立てを食べるが江戸っ子さ」と言う。今はこの上方のスタイルがどこでも普通だろう。

江戸前の鰻というのは、越谷吾山こがやまの方言辞書『物類称呼』175(二)では、浅草川・深川辺のものを呼ぶとしていた。

土用の丑の日に結び付けたのは、平賀源内が鰻屋から看板を頼まれ、「今日は丑」と書いたのに始まると言われている。白峰庵の回想録『明和誌』182(二)に、安永・天明(一七七一―一七九二)に、始まったとある。時代は合致しているが、源内のことは出ていない。文政四年(一八二二)の『柳多留』

七十三篇に「丑の日に籠で乗り込む旅うなぎ 早牛」という句がある。丑の日には鰻の需要が多くて江戸前のものでは足らず、地方のものを取り寄せる

とある。文政五年(一八二三)の『料理早指南 四篇』には、鋤やきは、雁・鴨の類を作つて溜まりに漬けておき、古い唐鋤で焼くと説明する。なぜ農具を使ったのか。江戸時代には獣肉を調理する時には、穢れを嫌つて、土間で調理したり、いつもとは違う道具を使つたりするなど、特別な扱いをした。右の二例は魚や鳥だけれど、そういう意識で、鍋ではなく鋤を使ったのではないか。

農具の鋤に落ち着いたのは、新村出が大正十三年一月八、九、十日の朝日新聞に載せた「鋤焼物語」(『南蛮更紗』所収)という考証随筆でこれを証明してから

ことを詠んだものだ。

夏に鰻を食べるのは、大伴家持の歌「石麻呂に我もの申す夏瘦せに良しといふものそ鰻捕り召せ」(万葉集・一六・三八五三)から、奈良時代にはすでに行われていたのが分かる。この歌には、あんな気味の悪いものをといて気持ちが見えるように思う。

関西で鰻飯をマブシ・マムシと言うのは、鰻を飯の上に乗せたものだからだ。『守貞謾稿』(生業上)に、京阪ではマブシ、江戸ではドンブリと言うとして、江戸では有名な鰻屋では売らず、中以下の鰻屋で出す、朝顔形の井鉢に盛つて、鉢の底に熱飯を少し入れ、その上に小鰻を焼いたのを五つ六つ並べ、また熱飯を入れ、その表にまた小鰻を六つ七つ置くと記している。

○柳川鍋

ドジョウの頭と骨を取り除いて、笹がきにしたゴボウといっしょに割り下

のことだ。それ以前には、大槻文彦『言海』では、「すきやき」を「薄切肉ニ醤油ヲツケテ焼クコト」と説明している。語源と言っているのではないが、そう考えているのだろう。落合直文『ことばの泉』(明治三年)では「透焼」と漢字をあてている。

「鰻焼き」という料理もあった。式亭三馬の文化十一年(一八一四)の『古今百馬鹿』(上)に、「鴨の鰻焼をして食はう。オット、鰻形をここへくんな」とあり、別に亭主が長火鉢で鰻焼きをする絵があり、三馬の「鴨の鰻焼するを 手料理の鴨と鰻には引き換へて付け焼ぎにではゆかぬ女房」という狂歌

を加えて土鍋で煮込み、玉子でとじたものが柳川鍋だ。

骨抜きドジョウ鍋は、文政(一八一八―一三〇)の初めころ、江戸南伝馬町(東京都中央区)の万屋が始め、その後、天保(一八三〇―一四四)の初めころに、横山同朋町(東京都中央区)の柳川という店が裏店で始め、表店に移つておいに流行して同じ名の店をいくつも開き、同じ名でない店でも売られるようになり、京阪にも伝わつたと『守貞謾稿』(生業上)に見える。柳川は店の名で、福岡県の地名ではなかった。

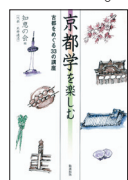
○すき焼き

スキヤキは農具の鋤で肉類を焼いたことによるというのが通説で、それが正しい。享和三年(一八〇三)に出た『素人庖丁』に、ハマチ(鰻)の鋤焼は、ハマチを三枚におろして二分(六ミリ)ほどに作り、唐鋤を火にかけて、よく焼けた時に油で拭い、その上で焼く、

○かしわ

鶏肉をカシワと言うことがある。正保二年(一六三三)に出た句集『毛吹草』(六)に、「散り敷くや庭に柏のめん鳥羽 宗朋」という、黄褐色の黄鶏を枯れた柏の葉に見立てた句がある。つまり本来は黄鶏をカシワと言つたが、後に肉も言うようになった。谷川士清の辞書『倭訓栞』に、「鶏また蛤の色にかしわ」と言ふも、榲桲の黄葉に似たるなり」とある。ハマグリにも言つたようだ。(つづく)

京都学の企て



糸井通浩 編
四六判上製・定価二五二〇円(税込)
京(みやこ)の自然・歴史・信仰、文学・文化……京都学まで、京都を愛し、京都学を学ぶ楽しさ、今昔の知恵があふれる、新しい切り口から京を掘り起こした一冊

そうだ、この本持つて、京都、行こう。

京野菜、祭り、仏像、観光学、京気質、酒、京菓子……京都は伝統的な文化都市でありながら、たえず革新でありつづける。そこに、京都学の大きな魅力がある。そつとておき、ほんまもんの京都を楽しく知的に案内。

京都学を楽しくむ 古都をめぐる33の講座

知恵の会(代表・糸井通浩) 編
A5判上製
定価三五七〇円(税込)

◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払*・クレジットカード**等がご利用いただけます。
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

- ①銀行振込の場合
三菱東京UFJ銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン(カ)
- ②郵便振替の場合
00120-3-41856 勉誠出版株式会社

- * 代金引換払の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)
- ** クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書き
いただければと存じます。

◆ 執筆分量…誌面二頁(一五〇〇字程度)ないし三頁(二三〇〇字程度)
◆ 入稿形式…テキスト形式(ワード、一太郎形式も可)

◆ 謝礼…ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。
ポイントは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問合せおよび送付先… mnimic@bensey.co.jp
メールアドレスに「勉誠通信原稿」と明記してください。

編集後記

手塚治虫「ブッダ」が、全3部作・アニメーションで映画化されるそうです(『手塚治虫のブッダ 赤い砂漠より美しく』)。公開は来年五月二十八日(土)とのこと。小学生の頃、安価な料金に釣られて通っていた地元の小きな理髪店があるので、そこにあった漫画が『ゴルゴ13』と『ブッダ』でした。

待ち時間のあいだ、絵柄の親しみ易さから『ブッダ』を読むことにきめたのですが、とにかく回転率のよい店だったため、毎回十分程度しか読む時間がありませんでした。二ヶ月ほど後に再訪問する際には、ほとんど筋を記憶しておらず、とにかく一巻ばかり繰り返し読んだことを記憶しています。当時、特に面白いとは思わなかったのですが、繰り返し読んだことから、常に記憶の片隅にある作品でした。それから十年ほど後、通っていた大学近くのアルバイト先の古書店でふと読み返してみると、とても味わい深い作品で面白い。個人的に大切な作品になったので、映画も見してみようと考えています。

近年刊行している勉誠出版の書籍には、広い意味で仏教につながる内容のものが多くなってきました。新刊『東アジアをめぐる金属工芸』中においても、阿育王塔の受容やその背景についての問題は重要なテーマとなっています。

非常に面白い一冊となっていますので、ぜひご覧頂ければ幸いです。(清井)